





の梶島悌蔵七段でした。身長も180cm台と長身で相面だと全くこちらの竹刀が届きません。「はじめ」の号令がかかり、竹刀が触れない距離で気合いをかけました。お互いにジリジリと間を詰めて、竹刀の先端が交差する距離まできました。その短い時間で「見事に相手に打たれよう」という考えは消えてしまい「強敵から何とか一本とれないか?」という気持ちになっていました。「俺は鉄平」の心境でした。相手は80%の確率で面を打ってくる。私の勝機はほんの少しコマ何秒か早く相手の動こうとする出端に籠手を打つしかないと考えました。間合いがさらに詰まってきた瞬間にほんの少し、身体を動かすと相手が面にくる気配がしました。その動こうとする瞬間に籠手に飛び込みました。両手に籠手の感触があり、私の籠手の一本勝でした。会場も大きくどよめきました。しかし、2回戦では高知の谷木利勝7段にアットという間に面の一本負けで、稽古不足という現実に戻されました。

2日目は始めに最高齢参加者、中山尚夫7段(85歳、三重県)と伊藤保憲7段(83歳、香川県)の立ち合いを全員で拝見しました。共に80歳代とは思えない気迫溢れる立ち合いでした。終了時には万雷の拍手でした。皆「自分はこの年代まで剣道を続けられるだろうか?」と呟いていました。

その後、団体戦になりました。7人戦ですが、混成チームがほとんどで大会本部が選手の割り振りをして計20チームが参加しました。私は「神奈川、広島、熊本、鹿児島、沖縄」のチームで大将に割り振られていました。

1回戦は韓国Bチームです。皆、元気で激しい剣道をします。私は引き分けでチームは勝利しました。2回戦は「岩手、秋田、宮城、茨城」との闘いでした。副将戦までは我がチームがリードしており、引き分ければ我がチームの勝ちという状況でした。相手の大将は今村幹雄7段(宮城県)で前東北大学剣道部の監督で強い方です。相手は勝たないといけないのでドンドン攻めてくると思いました。私も引き分け狙いですが、下がってしまうと打たれます。「後の先」でいくと決めていました。自分からは先に打たな



写真2 団体戦準優勝メンバー右から3人目が永山先生

い。相手が面か籠手にきたら、その竹刀を擦りあげて面を打つと決めていました。しかし、気持ちは常に相手より先に打つ気持ちを維持しないと瞬時の技は打てません。下腹部に力をいれて、左足の指先にも力をいれていつでも前に出れるようにしていました。また、上半身の力は抜きました。相手が一歩攻めたら、一歩は下がるが、2歩目は絶対下がらない。「さあ、こい。」「きたらいつでも返すぞ」と心のなかで呟きながら対峙していました。お互いの竹刀が触れ合う音のみが会場に響きました。下腹部の腹筋が痛くなってきた頃、「やめ」の号令がかかり、引き分けとなり我がチームの勝利に初めて貢献できました。お互いに一本も打たない試合は経験がないので、なぜ今村先生が打ってこなかったのか?不思議です。チームの林 優6段(琉大卒、東海大学産婦人科)に「お互いに一本も打たない、気迫と気迫がぶつかりあった試合で痺れました」と言われましたが、本当は稽古不足で動けなかったのです。準決勝は「京都、奈良、大阪」チームでした。私は倉都滋之7段(大阪)に面の一本負けでしたが、チームは勝利し決勝に進みました。決勝戦は若手主体の地元北海道に負けました。永山盛隆先生は飛行機の時間の関係で決勝戦には出場しませんでした(写真2)。

私は稽古量も不十分で、心不全もあり、当初は参加するかどうか迷いましたが、参加して良かったです。旧交を温めることができ、また新しい出会いもありました。診療の合間の短い期間でしたが「交剣知愛」が実行できた日々でした。2026年度の大会は静岡県で笠松紀雄先生が会長で行われる予定です。